

第41回 三重歯科・口腔外科学会抄録

The 41st Mie Meeting of Dentistry and Oral Surgery, Abstracts

日 時：平成25年12月7日

場 所：三重県口腔保健センター

1. 下顎骨由来骨肉腫 HOSM-1 細胞での phosphodiesterase 2A の特徴

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学¹榑原温泉病院 歯科口腔外科²○ 森田 寛^{1,2}, 清水香澄¹, 関田素子¹,
村田 琢¹, 田川俊郎^{1,2}

【目的】Phosphodiesterase (PDE) は、これまでに11種類 (PDE 1~PDE 11) の報告があり、様々な生理作用に関係する。これまでに我々は、ヒト下顎骨骨肉腫由来 HOSM-1 細胞の増殖能などに対する PDE 2 阻害剤の作用を報告した。しかし、HOSM-1 細胞に対する細胞毒性、運動能や細胞周期関連遺伝子発現に対する作用は不明である。そこで今回、これらを検討し報告した。

【材料および方法】PDE 2 特異的阻害剤 (EHNA) と、当教室で樹立継代しているヒト下顎骨骨肉腫由来 HOSM-1 細胞を用いた。細胞毒性は trypan blue exclusion test, 運動能は migration assay, および、細胞周期関連遺伝子発現は RT-PCR で検討した。【結果および考察】細胞毒性と運動能は、100 μ M EHNA を作用させても変化を認めなかった。また、細胞周期関連遺伝子 (CDK, cyclin) の mRNA 発現に変化は無かった。以前に報告した内容と合わせると、HOSM-1 細胞では PDE 2 が発現し、細胞周期に関連していると考えられるが、今後さらに詳細に検討する予定である。

2. 320 列 ADCT 画像による発音時の咽頭腔の体積変化

済生会松阪総合病院

歯科口腔外科¹, 放射線科²○ 佐藤耕一¹, 辻 忠孝¹, 鈴木 廷²

【目的】320 列 ADCT にて発音中の発声、構音器官の撮影、咽頭腔の体積の計測を行ったので報告した。【対象・方法】被験者は5人の健常な成人女性である。今回用いた CT は 16 cm 幅の撮影が可能で、任意の複数の方向や断面での 0.05 秒間隔の時系列の画像が得られる。被験者が /bampa/ と発音中の時系列画像を用いて口唇、舌、下顎、軟口蓋、声帯等を動的に観察した。

【結果】口唇、軟口蓋、声門等の運動は、時間に個人差はあるが、規則正しく行われていた。/ba/・/pa/ 発音前に体積は増加し、後続の母音/a/ の発音による舌根の咽頭後壁への動きに伴って体積は減少した。その減少途中に /ba/・/pa/ は発音され、/a/ 発音中に体積は最小値を示した。

【結論】口蓋裂術後、顎顔面部術後、脳血管疾患後遺症等の構音障害、嚥下障害の評価に本 CT の適応があると思われた。

3. TCI を利用した学生指導の試み (第1報)

ユマニテク医療福祉大学校

歯科衛生学科¹, 理学療法学科²○ 北川順子¹, 松岡陽子¹, 後藤すみ代¹,
森 美鈴¹, 笹間滋代¹, 渡瀬恵子¹,
島田隆明²

【緒言】近年、高等教育での学力低下が問われ

ている。本校では、解決策としてTCIコーチングを導入し学生指導を試みた。今回、退学者のパーソナリティの傾向を把握するため進級者と退学者について比較を行ったので報告する。【対象・方法】11期生40名、12期生41名、13期生45名、計126名を対象に入学時にTCIパーソナリティ診断を行った。【結果および考察】進級者と退学者の平均をタイプ別の分類で比較した場合、違いが認められたのは『気質』の行動促進であった。行動促進は対処行動である課題優先との負の相関が認められることから、計画的に時間をつかうこと、問題に焦点をあてて解決すること、優先順位を適正に判断することが苦手という『気質』を持っており、経験や環境整備によって変化する『性格』の成長を促す必要があると考えられた。【まとめ】退学者の該当する理想家のパーソナリティを持つ学生を早期に把握し、優先順位の決定への助言、課題提出までの計画等の指導を包括的に行っていくことで退学者数の減少へつなげると考えられる。

4. 鉛筆の持ち方の執筆状変法把持法への影響

伊勢保健衛生専門学校 歯科衛生学科

○ 島田裕子, 吉村由佳, 松本由美,
前田香代子, 中西康裕

適切なペンの持ち方が出来ない学生が多く、スケーラーの把持に支障をきたすため、ペンの持ち方とスケーラーの把持法との関連性について調査した。【対象】本校1年生41名【方法】①鉛筆の持ち方の確認②鉛筆の持ち方とスケーラーの執筆状変法把持法との関連性③執筆状変法把持法の実習指導開始時と指導後の変化④実習指導後の実技試験の結果について調査した。【結果】①鉛筆の適切な持ち方が出来た者は17.1%、不適切な者82.9%であった。②鉛筆を適切に持てる者のうち、スケーラーの把持が適切な者は71.4%、鉛筆の持ち方が不適切な者のうち、スケーラーの把持が適切な者は35.3%であった。③実習指導開始時にはスケーラーの把持が適切な者は41.5%だったが、指導後には63.4%に増加した。

④スケーリングの実技試験の結果は、把持が適切な者は平均77.1点、不適切な者67.2点だった。

【まとめ】今回行った適切なスケーラー把持のトレーニング法は有効であったと思われるが、実習指導後の現在もスケーラーを適切に把持できない学生もいるため、さらにトレーニング法を検討する必要があると思われる。

5. 口腔保健管理実習における教育内容の検討

三重県立公衆衛生学院 歯科衛生学科

○ 岡 景子, 岡村哲子, エイガン直美,
下村真理, 中世古文香, 前田尚子

【目的】3年制教育に伴い、主要三科目を統合的に捉える「口腔保健管理学」7分野を新設し、今回、その中の「情報収集」に焦点をあて、今後の実習課題について検討した。【対象および方法】対象は、歯科衛生学科3学年78名。調査内容は、SRP用顎模型の観察、41と46歯の4点法プロービング操作について、自記式質問紙調査を実施し、同時に教務評価を行った。【結果・考察】顎模型の観察から、1年生は正常像、2・3年生は病変像を読み取り、教育内容に応じた結果となった。操作基本項目と測定値との間に2・3年生は弱い相関を認め、基本操作の重要性が推測されたが、全学年の正答数は半数以下であった。また、ポケット底部の触知や3次元的に形状をイメージした操作は、低学年につれ「出来ない」と回答する者が多く、日常の実技訓練や臨床実習での経験が大きく左右すると考察された。測定値を浅く読み取った要因は模型歯肉部のシリコンゴムの摩擦によるものだと思われた。【まとめ】今回の結果より、実習回数の増加だけではなく模型を利用した解剖学的形態の熟知やレントゲン画像の活用など、実像をイメージさせ各学年に応じた段階的な教育が必要である。また、情報収集の向上においては臨床実習の経験が有用である。

6. 公衆衛生活動の場における相談内容とそのスキルについて

三重県歯科衛生士会

- 田中千暁, 松岡陽子, 竹田仁香,
金海京子, 近田紀子

三重県歯科衛生士会員は、公衆衛生の場で様々な対象者と接する機会が増えている。そのような場で、正しい対応をするためにはどのような回答をすればよいかを勤務医院での質問等と比較し、検討した。【方法】公衆衛生活動に参加経験のある会員が勤務医院と公衆衛生活動の場、それぞれで受けた相談・質問でどのような内容があったかを挙げた。【結果】院内での質問は具体的な内容の質問が多く、エビデンスに基づいた回答が出来る状況だった。公衆衛生活動の場での質問は、メディア等で耳にしたものや直接個人的な相談に繋がるものがみられた。特に高齢者に関するものは医科の分野との関連性の高い部分があり、回答に困る状況がみられた。挙げられた質問・相談内容について意見交換を行う中で、それぞれが自分のスキルを知り、もっと多くの知識や情報を吸収したいと感じていた。【考察】高齢者に限らず、口腔と全身のつながりが明らかな今、医科と関連する分野の質問や相談が多くなり、歯科医療だけでなく幅広い知識を得られるように自己研鑽を積むことの必要性が示唆された。歯科衛生士会として、研修会の内容については全身に及ぶ様々な領域も含めたものにし、会員のニーズを満たしていかなければならない。

7. 口腔ケアを行った口腔癌患者の3例

済生会松阪総合病院 歯科口腔外科

- 清水珠緒, 向出圭子, 日浦美和,
川口治奈, 前川礼子, 田中千賀,
稲垣奈央子, 鈴木康昭, 辻 忠孝,
佐藤耕一

【緒言】放射線化学療法を行った当科の口腔癌患者3例につき、治療開始より口腔ケアを開始し、粘膜炎、栄養状態の経過につき検討を行ったので

報告した。【症例の概要】症例1：84歳、男性、左側舌癌。症例2：85歳、女性、左側上顎歯肉癌。症例3：70歳、女性、右頬粘膜癌。症例1では、粘膜炎はGrade2と軽度であり、治療期間中の病院食は10割摂取、栄養状態も良好に経過した。症例2ではGrade3の粘膜炎を認め、経口摂取困難となり、経静脈栄養にて栄養状態の維持に努めた。口腔ケアの継続にて粘膜炎の重症化を防ぐことができた。症例3では、Grade4の粘膜炎を認め、鎮痛にオピオイドを用いたが、鎮痛困難で口腔ケア不可となった。経時的な回復を認めたが、経静脈栄養にても栄養状態は悪化し、ALB値は1.8まで低下した。【結語】口腔ケアにより、粘膜炎の重症化を予防し、経口摂取を維持できることが示唆された。

8. 放射線性顎骨壊死患者に口腔ケアを行った1例

松阪市民病院 歯科口腔外科

- 中西香織, 川合幸代, 仲田美樹,
原 浩子, 田端真衣, 宮崎くみ子,
野中計宏, 河本明代, 速水 毅,
吉岡 元, 松山博道, 中橋一裕

近年口腔ケアの重要性は広く認知されそのニーズも高まっている。今回われわれは放射線性顎骨壊死患者に口腔ケアを行った1例を経験したので報告した。【症例】60歳、男性。【主訴】右側下顎臼歯部の疼痛、腫脹、排膿【現病歴】初診約4か月前に右側下顎臼歯部自然脱落。徐々に疼痛出現し近医受診。精査加療を目的に当科紹介となる。【既往歴】喉頭癌による放射線治療、手術【処置及び経過】右側下顎臼歯部に瘻孔があり出血、排膿を認めた。パノラマX線写真にて右側下顎に顎骨壊死を認めた。情報提供にて喉頭癌に対して放射線治療を行った際、下顎も照射範囲に入っていたとの事より、放射線性顎骨壊死と診断し投薬、口腔ケアを開始した。2か月後、排膿継続、疼痛軽減、出血消失、セルフケア改善、4か月後、排膿継続、腐骨動揺あり、除去術施行。その後排膿消失、8か月後に投薬終了。その間口腔ケアは2週間毎に歯周基本治療、セルフケア指導

を繰り返し行った。1年2か月後に義歯を作成し装着した。【まとめ】放射線治療後の顎骨壊死は生涯的なリスクがある事が多い。継続的な口腔ケアは口腔内環境を改善、患者のモチベーション向上、今後のリスク軽減に重要であると考えられる。

9. 三重大学医学部附属病院口腔ケアセンターの設立について

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

- 小林 香, 山本秀美, 坂口幹子,
河宮和世, 駒田真澄, 渡辺恵美子,
永田 心, 奥村健哉

周術期における専門的口腔ケアは重要であると認識されつつある。三重大学医学部附属病院では、平成25年6月に口腔ケアセンター（以下、当センター）を設立した。当センターでは各診療科と連携をとりつつ、手術、がん化学療法、放射線治療患者を対象に入院前から退院後の外来治療まで継続した口腔管理が行えるような体制を整えており、具体的には術前検査とともに当センターの受診を予約し、初診時のリスク評価により歯科医院との連携をとるシステムとなっている。平成25年6月から10月までの初診患者数は毎月60名前後であったが、再診患者数は増加傾向にある。手術患者は72%、化学・放射線治療患者は16%であり、連携歯科医院への依頼件数は約13%であった。当センター初診時にすでに入院していたり、手術直前に初診となることも多く、連携歯科医院へ依頼できていない例も多いと考えられた。今後、患者数の増加が見込まれており、対象患者を入院前から確実に依頼されるような対策と、がん患者歯科医療連携登録歯科医院との連携の向上が必要である。

10. 口腔ケアを行った緩和ケア病棟患者の1例

済生会松阪総合病院 歯科口腔外科

- 向出圭子, 清水珠緒, 前川礼子,
川口治奈, 日浦美和, 田中千賀,
稲垣奈央子, 鈴木康昭, 辻 忠孝,
佐藤耕一

【緒言】口腔ケアを通して、患者と家族との信頼関係の構築、口腔内の衛生状態の改善、経口摂取を達成し、患者と家族の笑顔に出会う事ができた緩和ケア病棟患者を経験したのでその概要につき報告する。【症例の概要】患者は87歳、女性、うつ病の既往歴がある。悪性脳腫瘍にて本院緩和ケア病棟に入院中である。入院当初は経鼻経管栄養であり、PEGが検討されていた。入院前に在宅で口腔ケアが行われていたために口腔ケアの受け入れは良かったが、嘔吐反射が強く、入院当初の口腔ケアは口腔内の前方、前歯部に限られていた。頻回に訪室することで、患者の心との距離が近くなり、次第に口腔内後方へと口腔ケアが可能となり、経口摂取が可能ではないかとの兆しが見えてきたために、義歯作製したところ、十分な経口摂取が可能であった。【結語】口腔内を清潔にするだけでなく、経口摂取を可能とし、生きる力を与えることができた症例と思われた。

11. 紀南病院歯科口腔外科における嚥下診察の取り組み

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学¹

公立紀南病院 歯科口腔外科²

公立紀南病院 栄養室³

公立紀南病院 リハビリテーション科⁴

- 渡邊由裕^{1,2}, 糸川美智子², 南 奏子²,
沢田浩一³, 中村和貴⁴

摂食・嚥下障害は要介護高齢者に多く、誤嚥性肺炎を引き起こすだけでなく、脱水、低栄養といったさまざまな問題が引き起こされる。また口から食べることはQOLの面からも重要で、専門的なアプローチや他職種との連携が必要となる。当院

は三重県の最南端に位置する、僻地中核病院である。近年、医師の減少に伴い以前は行われていた嚥下造影検査（VF）が行われなくなっている。そこで、紀南病院歯科口腔外科では、平成24年12月より嚥下機能の評価を充実させるために嚥下内視鏡検査（VE）を開始したので今回概要について報告した。【結果】対象患者数は34名（男性18名、女性16名、平均年齢86歳）。全身疾患は誤嚥性肺炎などの肺炎が最も多く43%、次に脳梗塞、脳出血などの脳血管系疾患が19%、脳神経系疾患、循環器系疾患12%と続いた。

【まとめと考察】平均年齢は86歳と高く加齢による筋力の低下や神経筋機構のアンバランスによる摂食嚥下障害が考えられた。全身疾患では、誤嚥性肺炎などの肺炎が最も多かった。詳細な嚥下機能評価を行うことで経管栄養を回避することが出来る症例も存在し医療費の削減、QOLの向上につながると考えられた。

12. 三重病院における口腔ケアの現状と今後

国立病院機構三重病院 歯科口腔外科

○ 山口晋司, 北村朋子, 後藤優子

【緒言】近年、口腔内清掃の観点だけでなく二次感染予防やQOL向上、リハビリテーションの側面からも口腔ケアが重要視されている。三重病院は内科、神経内科、重症心身症患者など病床数260床で呼吸器を装着した患者も多く気道感染の予防のためにも歯科が介入し口腔ケアを行っている。今回我々は、病棟看護師88名に対し口腔ケアへの関心度、意識度についてアンケート調査を実施した。【結果】約8割の看護師が口腔ケアの必要性を感じていたが日常業務の忙しさから実際に口腔ケアにかかる時間は1回あたり約3分であった。口腔ケア用品の種類や使用方法に関する理解度が低いと考えられた。また、開口困難、舌苔除去困難、出血、口腔乾燥などケア困難な患者に対しての適切な方法がわからず苦慮していることもわかった。【考察】今回の調査により、必要性は認識しているが適切な口腔ケアの実施に至っていないことがわかった。効率的で安全に行える方法

の提供が必要で、負担と感ずる症例に対する連携体制や情報提供方法の検討が必要と考える。また、口腔ケアを特に必要とする患者の、入院後速やかに歯科が介入できるための環境整備、アセスメント等が今後必要であると考えられる。

13. 三重中央医療センターにおける口腔ケアの取り組み（第2報）

三重中央医療センター歯科口腔外科

○ 柳瀬成章, 鋤崎文子, 下田澄代,
高橋香織, 田辺知加

口腔内の衛生管理は感染に対する防御機構が低下した患者では全身管理の面から重要である。今回は当院での口腔ケアの状況について報告した。2012年4月から2013年9月までの1年6か月間に、院内他科より口腔ケアを依頼された128例を対象に、患者数の推移、紹介元診療科、紹介理由、主疾患、処置について検討した。月あたりの患者数は2013年7月までは10人以下だったが、周術期口腔管理について告知したことで8月以降は20人近くまで増加した。紹介元診療科は呼吸器科が40例、外科が39例と半数以上を占め、次いで脳神経外科、呼吸器外科、消化器科の順であった。紹介理由は口腔内の清掃不良、乾燥が54例と最も多く、次いで手術前の保清34例、粘膜の異常、化学療法施行前、施行中の管理14例、歯牙の異常12例の順であった。主疾患は悪性腫瘍が最も多く69例、次いで、肺炎、間質性肺炎20例、脳卒中10例の順に多かった。これらに対して、口腔清掃の他、歯周治療、補綴関連処置、抜歯等の外科処置、う蝕処置が行われた。依頼元診療科の偏りが問題点の一つとして挙げられ、院内他科に対し、当科への紹介を継続して働きかけることが重要と考えられた。

14. 伊勢赤十字病院における歯科口腔外科の初診患者の動向

伊勢赤十字病院 歯科口腔外科

○ 中村真之介, 平野吉雄

平成 24 年 1 月に旧山田赤十字病院が新築移転し、名称を伊勢赤十字病院と改めた。今回、移転後の当科初診患者の動向を報告した。

当院の病床数は 655 床、標榜科は 29 科で地域医療支援病院などの指定を受けている。外来の 1 日平均患者数は 958 名、入院は 626 名で病床利用率は 95.5% である。当科の初診患者は平成 24 年 1 月から平成 25 年 10 月までの 22 か月間で総数 3,932 人、男性 2,029 人、女性 1,903 人で男女比はほぼ 1:1 であった。年齢は 0 歳から 98 歳までで 70 歳代が最も多く、60~79 歳が約半数を占め、平均は 60.4 歳であった。1 か月平均は 178.7 人で、来院地区は伊勢市内が 2,121 人と半数以上を占めた。院外からの紹介は 755 人、1 か月平均は 34.3 人で、その内、歯科からの紹介が 26.9 人、医科からは 7.5 人であった。また、紹介患者数は移転直後より増加傾向にあった。疾患・依頼別では抜歯依頼が 393 人で半数以上を占めた。

院内紹介は 1,403 人、1 か月平均は 63.8 人であった。紹介科は頭頸部・耳鼻咽喉科 406 人、胸部外科 346 人でこの 2 科からの紹介が半数以上を占めた。また、周術期口腔機能管理計画を策定したのは 370 人で、1 か月平均は 19.5 人であった。

今後も院外の医院や歯科、あるいは院内他科との連携を深めながら診療を継続する予定である。

15. 榊原温泉病院歯科口腔外科の現状と展望

榊原温泉病院 歯科口腔外科¹

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学²

○ 油家千恵¹, 谷口ゆき¹, 森田 寛^{1,2},
田川俊郎^{1,2}

【目的】地域や社会の要請に応えるべく新たな取り組みを行うことは重要である。当科では平成 25 年 4 月より周術期口腔ケアを行っている。今

回、当科の課題を分析し今後の目標を検討することを目的に、当科の現状を調査した。【方法】平成 24 年度の受診患者のべ 2,412 人を対象に疾患内訳などを分析した。また、周術期口腔ケアは平成 25 年 4 月~10 月の 67 人を対象とした。

【結果】疾患内訳は 83.8% がう蝕などの一般的な歯科疾患で、次いで口腔粘膜疾患であった。周術期口腔ケアは男女比 1:4 であった。平均年齢は男性 71.2 歳で 60~70 歳代が 72%、女性 80.3 歳で 70~80 歳代が 74% を占めていた。手術の対象疾患は、約 4 分の 3 が大腿骨などの骨折であり、次いで腰部脊柱管狭窄症であった。【考察】周術期口腔ケアの患者が少ない、入院治療や全身麻酔下手術が少ないなどが課題と考えられた。したがって、医科と連携した周術期口腔ケアへの対応を進めて患者数を増加させる、埋伏智歯の抜歯等の全身麻酔下手術を行う、高齢の抗凝固療法を受けている患者の観血的処置を入院下で行うなど入院治療への対応を進めるなどが今後の目標と考えられた。

16. 大台町における歯科保健の取組について

三重県健康福祉部医療対策局 健康づくり課¹
大瀬歯科医院²

○ 石濱信之¹, 大瀬周作²

大台町において、町行政、町内歯科医師が連携し、乳幼児歯科保健対策に取り組んでいるのでその概要を報告した。町は平成 20 年度まで 3 歳 6 か月児歯科健診う蝕有病者率がワースト 2 位の状況が続いていたことから、町行政、町内歯科医師が連携し乳幼児歯科保健事業を立ち上げ、平成 19 年度「保育所フッ化物洗口」、20 年度「妊婦等歯科健診」、21 年度「2 歳、2 歳 6 か月児歯科健診・フッ化物塗布」、22 年度「歯科健診・フッ化物塗布」に 3 歳 0 か月児を追加、と事業を展開してきた。事業の企画にあたっては現状把握、事業目的の明確化、実施内容、評価方法の確認等を町担当者、歯科医師が共有しながら進めていった。その結果、21 年度からはう蝕有病者率が減少に転じ、24 年度には全国平均値まで改善されてき

た。現在、①乳幼児とその保護者の参画の場が必要。②子どもの豊かな将来のために歯・口の健康づくりを町全体で取り組むという雰囲気作りが必要。という課題が挙がっており、町は新たに住民アンケートを基に町全体での乳幼児歯科保健をスタートさせたところである。

17. 抜歯か保存か —その2—

戸田歯科医院

○ 戸田喜之

抜歯の基準として、深い縁下カリエス、歯根の2/3以上の骨吸収、根尖病巣等の有無が挙げられる。それ以外にも、対合歯、隣接歯、年齢、鉤歯、支台歯、補綴物と様々な条件で基準が変わると考えられるが、抜歯後補綴物を入れ、ハイ終了では患者の気付きの機会を無くしてしまう。歯科疾患の多くは生活習慣病で、口腔清掃、生活習慣の改善、定期検診の重要性等を患者に自覚させる必要がある。そこで、抜歯は最小限にとどめ、暫間被覆冠にて経過観察しながら維持管理を行った2症例について、昨年に引き続き経過を報告した。

【症例1】50歳、女性。主訴：下顎左側第2大臼歯歯肉腫脹。現病歴、既往歴：なし。処置および経過：主訴のみの治療で終了、5年後の来院時には歯周病が進行していた。【症例2】46歳、女性。主訴：上顎中切歯間離開。現病歴、既往歴：なし。処置および経過：主訴のみの治療で終了、3年6ヶ月後の来院時には歯周病が進行し、抜歯か保存か決めかねる状態まで悪化していた。

経過が長く何度も試行錯誤しながらの治療ではあるが、定期検診の定着、歯への関心が非常に高くなり、今のところ良好な結果が得られている。

18. 頬粘膜癌術後に生じた皮膚欠損に対しエピテーゼを用いて修復した1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 岩中義幸、矢野聖敏、佐藤 忠、
奥村健哉

【概要】頬粘膜癌術後に生じた皮膚欠損に対し、エピテーゼにより審美性の回復を図った1例を経験したので報告する。【患者】56歳男性【主訴】右側頬部腫脹【既往歴】糖尿病、高血圧、慢性閉塞性肺疾患【現病歴】初診2週間前右側頬部腫脹を自覚。近歯科受診し紹介にて来科。【現症】初診時右側頬粘膜に35×25mm大白色病変が見られた。CTでは、前方は口輪筋を越え、皮下脂肪に達し、後方は咬筋への浸潤が見られた。

【診断】右側頬粘膜扁平上皮癌 T4bN1M0 Stage IVB。【治療経過】化学放射線療法を行い(70.2 Gy 照射)、3か月後に腫瘍切除、頸部郭清及び大胸筋皮弁による再建を行った。術後約1週間で皮弁部が感染し、2か月後に脱落。右側頬部に20mm大の皮膚欠損がみられ、口腔内外が交通したためエピテーゼを作製した。エピテーゼ完成後、腫瘍の再発、転移により術後1年にて死亡した。

【技工操作】印象採得、模型作製後、ワックスアップし試適。シリコン材に顔料を混和し皮膚色と類似の色調を調合。その後埋没し、ベース色に調合したシリコン材を重合。顔料を用い皮膚色に近づけ完成。【考察】エピテーゼにより審美性の改善が図れたが、機能的には更なる改善が必要と考えられた。

19. 狭窄歯列弓のため気管内挿管が困難であった1例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学¹

三重大学大学院医学系研究科

病態解明学講座臨床麻酔学分野²

○ 中村千穂¹、佐藤 忠¹、橋本麻衣子¹、
松村佳彦¹、八木原正浩²、宮部雅幸²

下顎歯列弓狭窄により経鼻気管内挿管が困難であった症例を経験したので報告した。【症例】37

歳，男性【主訴】左側顎下部腫脹【既往歴】うつ病【現病歴】初診3日前より左側顎下部腫脹を自覚し紹介により当科受診。画像検査で左側顎下腺内に唾石を認め，左側顎下腺摘出術を目的に当科入院。【現症】側貌は軽度小顎症所見がみられ，口腔内は上下顎歯列が鞍状型を呈していた。下顎臼歯部は舌側へ著しく傾斜し，最狭窄部は第一大臼歯間で15mmであった。開口量は27mmであった。【麻酔経過】酸素6L下でプロポフォール100mgにて麻酔導入し，ロクロニウム40mgを投与。経鼻的に気管チューブ7.0mmを挿入し，マッキントッシュ型喉頭鏡4号で喉頭展開を試みた。しかし，喉頭蓋の確認ができず，次にエアウェイスコープで喉頭展開を試みたが声門の確認が不可能であった。さらに鼻出血で経鼻挿管が困難となったため，気管支ファイバーで確認しながらブジーを気管に挿入，それをガイドにして気管チューブを経口挿管した。【まとめ】歯列不正が原因で挿管困難となる可能性が考えられるため，術前にリスクを把握し，機材の変更や意識下挿管など適切な対応が必要であると考えられた。

20. 当科における鎮静下での治療についての統計

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学¹

三重大学大学院医学系研究科

病態解明学講座臨床麻酔学分野²

○ 久保田真沙加¹，井上 仁¹，堀 晃二¹，
清水香澄¹，宮部雅幸²

以前，われわれは，当科における静脈内鎮静下での治療について検討し，報告した。今回われわれは，前回の発表以降に行った鎮静下での症例について，統計学的検討を行ったので，報告した。

【対象】2010年11月から2013年10月までの3年間に当科で鎮静下に手術あるいは処置を行った64例。【結果】日帰り44例（男性20例，女性24例）。入院20例（男性11例，女性9例）。年齢は17歳から88歳にわたり，男女ともに50歳代から70歳代に多い傾向であった。入院日数は，入院1日から2日12例と最も多かった。症例は，インプラント，抜歯が増加傾向にある。既往歴は，

主に循環器疾患，神経系疾患であった。使用薬剤は，日帰り，入院でプロポフォールとミダゾラム併用が最も多かったが，日帰りでは，その他に笑気，ペンタゾシンが使用され，ばらつきを認めた。手術時間については，31分から60分が最も多く，麻酔時間では，90分から120分が最も多かった。【まとめ】インプラントおよび抜歯症例が多く，増加傾向にあり，中でも日帰り鎮静症例が増加してきており，今後も増加することが予想される。鎮静症例では術中および覚醒後の管理に十分注意が必要と考え，今後も検討を重ねていく予定である。

21. マクログロブリン血症患者の口腔出血管理について

市立四日市病院 歯科口腔外科

○ 上田 整，山本知由，石井 興，
藤堂陽子，小牧完二

【緒言】マクログロブリン血症は，1944年にWaldenströmが報告したIgMの異常増殖をきたす原因不明で予後不良な血液疾患である。血液過粘稠による易出血性，全身性リンパ節腫脹，肝脾腫などが認められる。今回われわれは，歯肉出血の止血に苦慮した本症例の経験を踏まえ，同疾患患者の口腔管理について血液内科と連携を始めたのでその概要を報告した。【症例1】80歳男性。IgM 9300 mg/dlの状態です。左上1，2辺縁性歯周組織炎における持続的な出血を認め，止血のために抜歯術施行。抜歯後出血を繰り返し，血液内科での化学療法を併せて止血を得た。本疾患患者の口腔出血によるQOL低下を避けるため，血液内科で管理中の患者の口腔管理を行った。【症例2】65歳男性。IgM 3190 mg/dlで左下3辺縁性歯周組織炎あり，抜歯施行し異常出血を認めなかった。【考察】文献的にはIgM 5000 mg/dlを境に易出血状態を呈するとされている。IgM > 5000 mg/dlで緊急対応が必要な場合は，血液内科での化学療法と併せて局所止血処置を最大限に駆使する必要がある。IgM < 5000 mg/dlの時期に血液内科と連携し，口腔管理を行い出血のリスクを下げることでQOL向上につながると考えられた。

22. 場面緘黙症患者における歯科治療経験

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 松谷博人, 若林宏紀, 永田 心,
奥村健哉

場面緘黙症は社会不安障害の一種で、言語能力に問題はないが、特定の場面で意思疎通が困難となる疾患である。今回、本症の患者に対し全身麻酔下に歯科治療を行った1例を経験したので概要を報告した。【症例】21歳、男性【既往歴】場面緘黙症、上顎洞炎【現病歴】右上6に冷水痛を自覚し近歯科を受診するも恐怖心が強く、治療困難のため当科初診となった。【パノラマX線所見】右上6、8左上4、8で齶蝕による透過像がみられた。【処置および経過】初診時にX線検査や口腔内診査は可能であったが、視線を合わせることはなく、問診に返答はなかった。右上6、左上4の齶蝕処置、両側上顎8抜歯を全身麻酔下に行うこととし、母親を介し患者の意思を確認した。術前検査では穿刺に対する恐怖心のため採血ができなかった。吸入麻酔導入後に末梢を確保して血液検査を行い、結果を確認した後に手術を開始した。両側上顎8抜歯、右上6の抜髄即根充、レジン充填および左上4レジン充填を施行した。術後も医療者への発言はなく、疼痛等の評価は不能であったが、翌日退院し外来にて経過観察を行った。また場面緘黙症についても、精神神経科にて行動療法を開始し、現在も通院中である。

23. 市立四日市病院歯科口腔外科における過去10年間の入院患者の臨床統計的検討

市立四日市病院 歯科口腔外科

○ 藤堂陽子, 山本知由, 石井 興,
上田 整, 小牧完二

【緒言】市立四日市病院歯科口腔外科は北勢医療圏の基幹病院であり、口腔外科疾患を主とした治療を行っている。今回われわれは、当科における過去10年間の入院患者の臨床統計的検討を行ったので報告した。【対象】対象症例は、2003年4

月より2013年3月までの10年間に入院加療を行った2,943名であり、性別、年齢、医療圏、麻酔法、疾患別患者数、在院日数について検討した。【結果】性別では男性1,656名、女性1,287名であり、年齢別では20代、60代を多く認めた。医療圏は四日市市内、鈴鹿市、三重郡、桑名市の上位4地域で全体の85%を占めた。麻酔法は全身麻酔以外の麻酔法が57%、全身麻酔法が32%、手術が実施されない入院症例が11%であった。疾患別では抜歯、悪性腫瘍、嚢胞、外傷で全体の64%を占めた。在院日数は全体的に減少傾向であり、特に悪性腫瘍、顎変形症、外傷で在院日数が減少していた。【考察】経年的な患者数の増加、および、在院日数の減少は2008年度から導入されたクリニカルパスが一要因ではないかと考えられた。

24. 当院における過去10年間での口腔内転移腫瘍の臨床的検討

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 若林宏紀, 永田 心, 野村城二,
乾眞登可

今回われわれは、当科を受診した口腔内転移腫瘍患者の臨床像、治療法、転帰等について検討を行ったので報告した。対象は2003年7月から2013年6月までの10年間に受診し、口腔内転移腫瘍と診断された5例である。対象期間内における顎口腔悪性腫瘍に占める転移性腫瘍の割合は219例中5例で2.3%であり、従来報告されている1~3%という頻度と一致していた。その内訳は男性3例、女性2例で、年齢は19歳から82歳にわたり、平均年齢は60.4歳であった。発生部位は上顎歯肉1例、下顎歯肉2例、上下顎歯肉1例、下顎骨1例で、原発部位は肺が3例で最も多く、腎1例、上腕骨1例であった。組織型はそれぞれ淡明細胞型腎細胞癌、肺小細胞癌、肺多型癌、肺腺癌、Ewing肉腫であった。4例では、原発巣の診断から2年以内に転移巣が診断されており、その他1例では25年が経過していた。転移巣に対する治療は2例で姑息的治療が行われ、Ewing肉腫では根治的治療がなされた。残りの2例では治療は行われなかった。治療例では病変が縮小し、

機能障害が改善されていた。予後は極めて不良であり、Ewing 肉腫を除く 4 例で原病死していた。

25. 舌ピアスの舌深部への迷入の 1 例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 井上 仁, 中村千穂, 橋本麻衣子,
清水香澄

【緒言】近年、舌や口唇、鼻翼など顎顔面領域に装飾を目的としたピアッシングを行っている者が少なくない。今回われわれは、舌に装着した金属ピアスの一部が症状なく舌深部に迷入したまま経過し、抜歯前に撮影した X 線写真にて偶然に発見した例を経験したのでその概要を報告した。

【症例】患者は 19 歳男性。右側下顎智歯部の疼痛を主訴に来科。初診日 5 日前より、右側下顎智歯部の腫脹・疼痛を自覚し、近歯科医院を受診。抜歯を勧められ紹介により当科初診となる。【処置および経過】抜歯前に撮影したパノラマ X 線および CT 所見にて舌前方部、正中付近に類円形の金属様不透過像が認められた。右側下顎臼歯部の腫脹・疼痛等の症状に改善がみられたため、舌内異物除去を優先し、局所麻酔下で舌内異物摘出術を施行した。摘出物は直径約 4 mm 大、球状の金属で、舌装飾用金属ピアスの一部品であった。また表面に腐食などは見られなかった。【考察】本邦において舌ピアスによる迷入等の報告は自験例を含め 5 例みられ、全例で 10 代であり、自己にてピアッシングを行っていた。舌内異物により感染を起こした報告もみられることから、早期に異物除去を行う必要があると考えられる。

26. 侵襲性歯周炎の 20 年経過の 1 症例

医療法人尚志会 林歯科医院

○ 林 尚史, 西浦美貴, 菊地正高

今回、侵襲性歯周炎の患者に対して歯周病治療および長期のメンテナンスにより 20 年間良好に経過した症例について報告した。

【患者】34 歳、女性。【主訴】11 の自然脱落

【既往歴】特記事項なし【現症】全顎的に重度のアタッチメントロスが認められた。6 mm 以上のポケットが 42%、4~5 mm のポケットも 25%認められた。【処置および経過】初診時に 21 を抜歯、テンポラリーレストレーションを装着後歯周初期治療、全顎の歯周外科処置を行い歯周病の改善が認められたため補綴処置を行い、1 年 6 か月後よりメンテナンスに移行。2 年後に 37 の再治療。3 年後に 24, 25 の治療。12 年後にう蝕により 36 を抜歯し、同部位に 38 の移植。20 年後、う蝕による歯牙破折により 16 を抜歯し、同部位に 18 の移植を行った。【まとめと考察】本症例は重度に進行した侵襲性歯周炎であったが、20 年間メンテナンスにより良好な臨床結果が得られている。20 年間で 2 歯を失ったがいずれも 8 番の移植でリカバリーでき現在歯数は 25 歯である。喪失の原因はいずれもう蝕で、細菌叢の変化が疑われる。今後も慎重にメンテナンスを行い、経過観察を続けていきたいと考えている。

27. 舌に生じた筋上皮腫の 1 例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 福岡 豊, 堀 晃二, 奥村健哉,
乾眞登可

【緒言】筋上皮腫は耳下腺に発生することが多く、小唾液腺に発生することはまれである。今回われわれは舌に発生した形質細胞様型筋上皮腫の 1 例を経験したので、その概要を報告した。【症例】6 歳・女兒。主訴：右舌腫瘍。現病歴：初診 1 ヶ月前に定期健診のためかかりつけ歯科医院を受診。右側舌縁部に腫瘍を指摘され、2 週間経過観察をしたが改善しないため、当科へ紹介され来科した。現症：右側舌縁部に 7×5 mm 大の発赤を伴う腫瘍を認め、境界明瞭、弾性硬であり、疼痛等は認めなかった。【処置・経過】舌良性腫瘍と臨床診断し、粘膜、周囲組織を含め切除術を行った。腫瘍は被膜に覆われており、剖面内部は白桃色で充実性であった。病理組織所見：H-E 染色像では重層扁平上皮下の線維性間質組織内に結節状の腫瘍状病変を認め、硝子様細胞質と類円形から楕円形の核が偏在している、いわゆる形質細胞

様の形態を示す立方状～紡錘形細胞を認めた。免疫染色像では S-100 タンパクおよび α -SMA とともに陽性を示し、CK-7, CK-14, GFAP, p 63, CD 34, HNF-35 ではすべて陰性であった。確定診断：形質細胞様型筋上皮腫。術後 1 年で経過は良好、現在再発は認めていない。

28. 歯肉出血を契機に発見されたオスラー病の 1 例

松阪市民病院 歯科口腔外科

○ 吉岡 元, 松山博道, 高橋 元,
中橋一裕

【緒言】オスラー病は、全身の皮膚、粘膜、内臓の多発性血管拡張、反復性出血、家族内発生を主徴とする常染色体優性の遺伝性疾患である。今回われわれは右側下顎智歯部歯肉の異常出血からオスラー病と診断された症例を経験したので報告する。【症例】患者は 49 歳、男性。家族歴は母親が脳動脈瘤で手術歴があった。初診時全身所見に特記事項なく、前額部、舌背部に血腫様の血管拡張所見を数か所認めた。右側下顎智歯部歯肉に持続性出血を認めた。血液検査所見では止血・凝固機能に異常は見られなかった。【処置および経過】右下智歯周囲炎と診断、抗生剤等を処方し、1 週間後に経過観察を行ったが、わずかな局所刺激で再度出血した。単純な智歯周囲炎とは考え難く、現病歴等考慮し内科対診。精査の結果、臨床診断基準に基づきオスラー病と診断した。【考察】反復する鼻出血、舌と頭部の毛細血管拡張、肺と肝の血管奇形からオスラー病と診断した。オスラー病の患者は鼻出血や口腔内出血を主訴に歯科や耳鼻咽喉科を受診することが多い。合併症の治療と動静脈奇形の早期発見のため定期的経過観察が必要である。

29. 腫瘍性病変を疑った唾石に起因する下唇小唾液腺炎の 1 例

市立伊勢総合病院 歯科口腔外科

○ 伊藤聡富子, 木下靖朗, 谷口真一

小唾液腺炎は原因や経過により多様な臨床症状を呈し、ときに他疾患との鑑別が困難である。今回われわれは下唇に腫脹をきたし、小唾液腺炎および唾液腺腫瘍を疑い腫瘍切除術を施行したところ、病理組織学的検査にて唾石に起因する小唾液腺炎と診断した 1 例を経験したため報告した。患者：68 歳、男性。主訴：左側下唇の腫脹。既往歴：肺気腫、前立腺肥大症、白内障。現病歴：初診 1 年前より左側下唇粘膜の腫脹を繰り返していたが、自然消失したため放置していた。しかし、次第に左側下唇に口腔内外に及ぶ腫脹と自発痛を自覚するようになり、近歯科を受診したところ当科を紹介され、来院となった。初診時所見：左側下唇皮膚および同部下唇粘膜に 1.5×1.5 cm 大、弾性硬の腫脹を認め、粘膜直下に境界明瞭な可動性がやや低い腫瘍を認めた。臨床診断：小唾液腺炎または唾液腺腫瘍。処置および経過：約 2 週間後、局所麻酔下にて下唇腫瘍摘出術を施行した。腫瘍の側面の剥離は容易であったが、下面は口輪筋との癒着を認めたため、口輪筋を一部含め腫瘍摘出を行った。病理組織学所見：炎症性細胞浸潤を伴う肉芽組織および線維性組織と萎縮した唾液腺組織を認めた。病変中央に唾石と思われる石灰化物を認めた。

30. 下顎骨にみられた転移性 Ewing 肉腫の 1 例

三重大学医学部口腔・顎顔面外科学

○ 佐竹真実, 加藤英治, 松村佳彦,
野村城二

Ewing 肉腫は、主に 20 歳以下の大腿骨、肋骨等の骨髄に好発するが、顎骨に関連した報告は少なく、中でも顎骨に転移を生じた例は稀である。今回下顎骨にみられた転移性 Ewing 肉腫の 1 例を経験したのでその概要を報告した。【症例】18

歳，男性【既往歴】左上腕骨 Ewing 肉腫【現病歴】2 か月前より左側下唇，オトガイ部の知覚鈍麻を自覚したが改善せず，初診3 日前より左側頬部の腫脹，開口障害を認めたため来科した。【現症】体温は 37.6℃，左側頬部の腫脹と開口障害がみられた。血液検査で CRP，白血球数が高値を示し，MRI では病変は 21×33 mm 大で下顎骨内に存在し，内側翼突筋，咬筋へ浸潤する像を認めた。【処置および経過】左下顎骨腫瘍と臨床診断し，消炎後にエコー下での針生検を行った。病理組織学的には，細胞質に乏しく核が濃染した小円形細胞腫瘍がみられ，上腕の Ewing 肉腫と同様な像を呈し，また，CD 99 も陽性であることから，Ewing 肉腫の下顎骨転移と診断された。治療については小児科主治医と相談の上，TI 療法及び放射線療法が施行された。効果は PR であり，退院後現在外来にて経過観察中である。